



乙女文楽の「二人三番」(さんばさん)

男性が担い手の人形淨瑠璃文楽とは対照的で、女性だけで継承されてきた「娘義太夫(女流義太夫)」と「乙女文楽」。明治・昭和初期に一世を風靡し、アイドル並みの人気を集めながら、今では後継者不足が深刻となっている。新規ファンを呼び込むうえ、継承者でつくる関西の2団体が今月28日、初の合同公演を大阪・国立文楽劇場で開催する。

(坂成美保)

女性「文楽」夢の初共演



「瑠璃の会」の(左から)竹本住蜂さん、豊沢住輔さん

娘義太夫と乙女文楽

後継者不足「多くの人知る機会に」

志賀直哉も夢中 アイドル並み人気

漱石の小説に登場
娘義太夫は、語り手「太
夫」と三味線弾きの女性」
による義太夫節で、明
治期の東京、大阪で熱狂的
な人気を呼んだ。男子学生
ら追っかけファンによる
「ひうする連」も結成され
た。

夏目漱石の小説『三四郎』
には、実在の人気演者・豊

吉田光子さん(故人)を
た三四年後が同級生に「昇
助とはなんだ」と尋ね
「寄席へ出る娘義太夫だ」と
と教えられる場面がある。
志賀直哉も昇助の妻に夢
中になった一人で、日記に
「我理想的の芸術家として円
満に發展せん事を祈る」と
記している。

たが、戦後は「女流義太夫」と呼ばれ、担い手の竹本駒
之助さんは人間国宝に認
定された。関東で毎年公
演するようになつた。

一方、乙女文楽は大正末
期に考察され、宝塚などの
少女歌劇チームを背景に昭
和初期の大坂で花開いた。
少女たちが「一人遣い」で
人形を握り、當時盛んだった
人形劇アーティストの演技に
合わせて上演。1960年代以
降は、人形劇アーティストの
演技が減っていった。

9人が所属している。
一方、乙女文楽は大正末
期に考察され、宝塚などの
少女歌劇チームを背景に昭
和初期の大坂で花開いた。
少女たちが「一人遣い」で
人形を握り、當時盛んだった
人形劇アーティストの演技に
合わせて上演。1960年代以
後は、人形劇アーティストの
演技が減っていった。



乙女文楽が盛んだった頃の舞台写真
(京大演劇博物館所蔵)

演目は娘子の再会場面で有名な「櫛城・阿波の鳴門・順化歌の段」など。瑠璃の会の竹本住蜂さん(62)は、「人形淨瑠璃の古典には、女性演者の声や雰囲気、びたり合う演目も多い。一度きりで終わらせ、多くの人が知る機会にしたい」と意気込む。林公子・近畿大教授(近世芸能史)は、文楽は男性が演者となって継承されてきたが、明治以降、女性が演者となって継承されることが、明治以降、女性が担い手となる芸能が生まれたことは、現代につながる多様性を示している。上方・大阪の文化の豊かさの象徴でもあり、継続的な公演に期待する」と語っている。